

書評コーナーに寄せて

2021 年度の大学院教育と成果発信

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻教授／多文化共生研究所副所長
亀井伸孝

今号においても、本学大学院生参加の形態による書評コーナーを掲載する。本誌書評コーナー編集担当者として、これまでの経緯と今号の成果の背景について解説する。

1. これまでの経緯(2018、2019、2020 年度)

本誌『共生の文化研究』に書評コーナーが初めて設置されたのは、3 号前に当たる 13 号(2019 年 3 月刊行)であった(亀井編, 2019)。2018 年度前期の大学院国際文化研究科博士前期課程 1 年次の必修科目「国際文化論」において、履修者を対象に、書評執筆のための基本的なスキルの指導を行い、同科目内で書評執筆課題を複数回こなした。さらに、提出物の中から優秀であると認められた作品を選定し、執筆した院生に本誌への掲載の機会を提供する旨の打診を行った。その希望を申し出た院生たちを対象に、さらに加筆修正の指導を行った上で、初めての書評コーナーの刊行にこぎ着けた。最終的に、博士前期課程 1 年次(当時)の大学院生 5 名(同年度「国際文化論」履修者)による 5 件の書評が掲載された。

2019 年度は、2 回目の試みとして、投稿資格をもつ院生のカテゴリーを拡充した。

【書評投稿者のカテゴリー】

(2018 年度は (1) のみ、2019 年度から (2) (3) を追加して拡充)

- (1) 大学院国際文化研究科博士前期課程 1 年次必修科目「国際文化論」の 2019 年度前期履修者全員に書評執筆のスキルを指導した上で、優秀作品を選定し、その中の希望する院生に投稿資格を提供する(2018 年度と同様)
- (2) 前号で書評を執筆、掲載し、そのスキルをすでに習得している、大学院国際文化研究科の院生にも投稿を呼びかける
- (3) さらに、大学院国際文化研究科博士後期課程の大学院生も対象に加え、投稿の機会を提供する旨の呼びかけを行う

こうした呼びかけの結果、2 回目の試みである本誌 14 号(2020 年 3 月刊行)においては、博士前期課程 1 年次 2 名(同年度「国際文化論」履修者)、博士前期課程 2 年次 1 名(投稿経験者)、博士後期課程 1 名(新規投稿者)の計 4 名による 4 件の作品を掲載することができた(年次はいずれも当時)(亀井編, 2020)。

3 回目となった 15 号(2021 年 3 月刊行)でも、前号の形式を踏襲した。大学院国際文化研

究科博士前期課程 1 年次必修科目「国際文化論」の 2020 年度前期履修者全員に対し、書評執筆のスキル教育を行った上で、優秀作品の執筆者に投稿の機会を提供した(上記 (1) に相当)。それに加えて、執筆・投稿経験のある院生(同 (2))や、博士後期課程の院生(同 (3))にも呼びかける形で、原稿を募集した。その結果、博士前期課程 1 年次 4 名(同年度「国際文化論」履修者)、博士後期課程 3 名(うち 1 名は投稿経験者、2 名は新規投稿者)の、計 7 名による 7 件の作品を掲載することができた(年次はいずれも当時)(亀井編, 2021)。

2. 今号の取り組み(2021 年度)

4 年目となる今回の本誌 16 号においては、前号の形式をほぼ踏襲しているものの、いくつかの変化が見られた。まず、大学における研究所体制の改革が行われ、2021 年 4 月から、多文化共生研究所が大学院国際文化研究科附置の研究所ではなくなり、全学の組織として設置された研究推進局の下に移管された。このことにより、書評などの公募を国際文化研究科の院生に限定して行うことが難しくなった。また、書評コーナーの編者である筆者が、2021 年度から本学の入試・学生支援センター長の役職を兼務することとなり、書評の募集や指導、編集に十分な時間を割くことが困難になった。以上の理由から、今号では、慣例として行われてきた大学院授業とのコラボレーション、すなわち「大学院国際文化研究科博士前期課程 1 年次必修科目「国際文化研究基礎」(2021 年度より「国際文化論」から同科目名称に変更された)の 2021 年度前期履修者全員に対し、書評執筆のスキル教育を行った上で、優秀作品の執筆者に投稿の機会を提供する(上記 (1) に相当)」方法に限定して、原稿の募集を行った。

「国際文化研究基礎」の授業内課題の形で、2021 年度の選書基準を以下の通り示した。

【書評対象書籍の選書基準】(2021 年度)

- (1) 以下のキーワードのいずれかに関わりの深い書籍を選ぶ
多文化共生、異文化理解、言語・文化の多様性、ダイバーシティ、社会調査、フィールドワーク、研究倫理
- (2) なるべく、新しい作品(過去 5 年以内程度のもの)が望ましい
- (3) 他人に紹介したいと思える良書を選ぶようにする。また、既読の書籍よりは新たに組み込む書籍の方が望ましい

同時代に向けて発信される書評としては、なるべく新しい著作を選定することが望ましいということを基本方針としている(上記基準 (2))。ただし、刊行から多少年数の経った著作であっても、古典としての価値、同時代において広く読まれるべき意義をそなえた作品であれば、その位置付けを明確に論旨に盛り込むことを条件に、柔軟に書評の選書対象として受け入れた。

最終的に、今号では、博士前期課程 1 年次 7 名(同年度「国際文化研究基礎」履修者)による 7 件の作品を掲載することができた。

このような取り組みの継続を通じ、大学院教育を基盤とした、学問的な交流と発信、学際的な議論の振興を図ることができればと願っている。

亀井伸孝編, 2019.「書評コーナー」『共生の文化研究』(愛知県立大学多文化共生研究所)

13: 123-133.

亀井伸孝編. 2020.「書評コーナー」『共生の文化研究』(愛知県立大学多文化共生研究所)

14: 146-154.

亀井伸孝編. 2021.「書評コーナー」『共生の文化研究』(愛知県立大学多文化共生研究所)

15: 222-244.